**石見・長門・豊前紀行**

長月の中ば（新暦10/23-28）、

津和野、萩、長門、仙崎、下関、巌流島、門司へ。

**津和野町**

森鴎外、西周でイメージされる島根の町。

山陰の小京都と言われ、人口は７５００を切る。

城跡を誇る城下町でもある。

駅前、店閉まり、コンビニもスーパーも見当たらず、

案内書の食べ処も開店休業でわびしい。

メイン通り「本町通り」「殿町通り」を歩く。

観光客も目立たず、医院が一軒。

津和野カトリック教会が眼前に。

水彩画の似合うたたずまい。

ゴシック様式？で畳敷きの教会とある。

母校六甲の同窓会誌で、

この教会の記事を目にした。

水量幅少ない津和野川が、L字に曲がり、

浅く清く町中を北流する。

殿町の白壁と掘割と花菖蒲の葉、

エサをねだり、ぶつかり合う大きな鯉の群れで、

周囲の静けさと、眼前の動の世界が、

水面に波紋し、カメラを向けたが、撮影はやめ。

散策を続ける。「柚子アイスクリーム」看板。

顔立ちよき中年女性と目が合い、ついフラフラと。

「おまけ！」と言い、

詰め込んでくれたテンコ盛りの美味さに、

家内も小生も、津和野の印象が一転して好好！

津和野と言えば、SL「やまぐち」号。

土日運行のため、その雄姿を目にできず。

津和野の駅舎の側にD51が展示されていた。

東と西で高く迫る山々が、

午後の四時頃から、その陰りで通りを覆い始め、

この季節、肌寒さも一気に加速する。

東に陣取る青野山の頂上あたりが、

西行を急ぐ太陽の光を受けて、

淡く輝き、日没前の陽光礼賛となる。

夜、ホテルから外を眺めると、真っ暗闇。

たまに通る車のヘッドライトが唯一の光源。

その光線が上下に真っすぐに揺れて、見とれる。

翌日、萩を目指し、津和野駅から防長バスの山路行。

駅前で目にしたのは、東の青野山を閉ざす霧の上昇。

１０時少し前なのに濃霧が発生する。

天空から見れば、名高き「山陰の雲海」である。

萩まで1時間半の行程で、乗客は多いときで7人。

儲かっているのか心配になる。

家々の屋根瓦がオレンジ色（正確には、茶褐色）で、

山陰の地で明かるく、イタリアの景色が浮かぶ。

黒色瓦の家屋もあるが、地元で、黒の極く少数派は、

「変わり者」と言われることもあるらしい。

国道９号線右手に、**「静御前の墓地」**の案内板。

彼女の墓地は処々にあり、ここは山口県阿東町徳佐。

どのような由緒か？

**萩　市**

バスは、JR「東萩駅前」に。

萩駅より東萩駅が大きく、萩市の中心駅である。

萩駅は住宅街にあり、小さく、これでもJRの駅？

萩！訪れたいとの長年の念願が実現。

二泊だったが、再訪を誘う「身近な歴史」の町である。

中でも、特に心に刻まれたのは、松陰神社と周辺、

萩・明倫学舎、萩博物館、豪商菊屋家住宅、

萩城下町の白塀の通りや、

「鍵曲（かいまがり）」と呼ぶ直角通りの町並み。

当地では、吉田松陰先生と言わなければならない。

吉田松陰歴史館の前で孤独に石に座る外国人。

声をかけると、アリゾナ州から。

幕末の毛利藩と米国の関係の研究者とか。

日本に若いとき住み、「日本人ヨリ日本語デキル！」

と癖のある発音で言う。

アメリカ人にしては全く陽気さがなく、小声で、

あまり可愛げのないジイサンではあった。

行き交う土地の人々を眺めながら気づいた。

中学生や高校生の男子の引き締まった顔と、

真っすぐに前を姿勢よく歩き、

スマホなどいじるのがいないこと。

ふざけながら下校する者もいない。

各所で、案内や説明員には、定年過ぎの人が多く、

聞けば聞くほど説明も詳細で、生真面目で、

教師のOBやOGと思われ、人材活用の実践中。

説明員（女性）に、中高生男子の印象を話すと、

「そうですか。有難う・・・」とのこと。

理由は詮索せず。

さて、

武骨な印象の土地にふさわしくない「萩」の地名。

由来を聞くと、その昔は広く一帯が「椿」の群生地。

ツバキの「ツ」が脱落し、「バキ」から「萩」へ。

納得はしがたいが、一理あり。

萩では、展示物が間取り大きく、説明版も大きく、

天井高く、頑丈に展示され、

しかも全てが清潔で清掃が行き届く。

日本の各地で目にする、チマチマ展示、

キチキチ展示、ナンデモ展示、トニカク展示の、

余裕のなさが、萩にはない。

藩校跡の萩・明倫学舎は建物も展示物も圧巻である。

理屈をこねれば、「圧校」となるのか？

学芸員らしき人（初老の女性）と会話を楽しむ。

毛利藩の参勤交代の歴史物展示の前で。

北、西、南は海に面し、

東は江戸、つまり徳川幕府に対峙し、

得体の知れぬロシア、朝鮮、清に隣接する危機感は、

藩内の上下を問わずの常在戦場の意識の継承となった。

毛利藩は、遠隔地からの参勤交代に代々苦しみ、

時経て、高揚する怨念と、徳川幕府の弱体化が重なり、

チャンスと見て、討幕の先鋒となる。

今でも、様々な危機意識は、

日本の中でも高いと思うとのこと。

彼女は、武術の心得もありそうな背筋ピンとシャン。

ここ萩は、さらりと通り過ぎれば、

教科書的な幕末と維新の町であるが、

土地の人々や遺産・遺物との語らいから得たのは、

山陰の近世・近代の歴史遺産を代表する町であるとともに、

幾多の試練を経て、なお今に自信と誇りを持ちながら、

引き継ぐ歴史を有する土地柄に思え、

好感の持てる萩、の旅であった。

付け加えれば、

萩には周囲と不釣り合いな高い建物がなく、

（例外は、東萩駅近くの、ド派手なパチンコ屋）

繁華街もなければ、紅灯の巷もない。

これでは、ニヒルなスネ者、シニカルな文屋、

ルーピーな評論家、酔っておだを上げる作家は育たない。

自然主義文学の土壌ではない。

東萩駅前さえ、のみ屋、焼き肉屋、ホルモン屋も

入り口も壊れるか閉じてて無人の有様。

簡易風のビジネスホテル２軒も廃業の様子。

しかし、端然として広き城下町が今も健在。

**長門市**

長門と言えば、海軍戦艦の「長門」と、

何だかうろ覚えの「木村長門守」。

さらに、安倍総理三世代の選挙区の憶え。

「長門市駅」に降りる。想像とあまりにも違う。

小さな駅舎で駅前も静かで、安倍カラーの演出はゼロ。

バスで北へ半島のように突き出た仙崎へ。

さらに、仙崎港から青海島一周の観光船乗り場へ。

「波風荒く、南側だけの半周」とのアナウンスで計画中止。

周囲４０キロで「海上アルプス」と言われ、

洞門や断崖絶壁が見どころとかで、楽しみにしていたが。

仙崎は、

童謡詩人の金子みすゞの出生地であることを知る。

記念館もあるが、数少ない列車の発車時刻のために割愛。

帰宅後調べると、若くして歌に生き、

生真面目に、女性としての役割に取り組んだ淑女と見る。

女性と「仁」を結びつける思想は、

仁侠女は別として、古来よりないと思うが、

全くの素人感想ではあるものの、

か弱い彼女ながら、自己抑制と他者への思いやりの、

「仁」的要素を、深く静かに、詩歌に宿らせ、

しかも、押し寄せる数々の困難にもめげない、

彼女の存在が大きくうかがえ、

仁なる生、「仁生」とでも言うべきか、

を貫いた淑女と観た。

若くして旅立ち、今は、幸せである。

長門市駅から下関を目指す。

天気も良く、鈍行の山陰本線の車窓風景も良い。

響灘の海岸風景も遠く近くに、

冬は寒風吹きすさぶ荒海となるのだろう。

**下　関**

下関駅からタクシーでホテルへ。

今時珍しく若い運転手なので、最近の景気を聞く。

新駅効果も薄れ、若者の職場が限られ、

高齢者ばかりが増え、若い連中がよそへ移り、

得体の知れない外国人が定住し、

観光客も日帰りが多いようだ。

得体の知れないとは、「何で食っているのか？」の意味。

日本人でも食うのが大変なのに。

下関の売りは、先ずは「カモンワーフ」と「唐戸市場」

共に、ホテルより数百メートルで歩いて行く。

ホテル周辺の商店街は全てシャッタを閉じ、

「カモンワーフ」に食われて閉まった？ようだ。

地域活性化の音頭も、厳しい現実を伴奏する。

下関岸壁に二隻の我が日本の国防の練習艦。

係留は横列でなく、立列の平和優先の日本陣形。

傍で見ると、それなりの迫力。

チャイニーズの連中がガヤガヤと撮影中。

小生も撮るが、北鮮・露・中・韓での撮影なら、

たちまちに拘束され、スパイ罪で５～６年は臭い飯。

彼らは束縛なき自由を享受。

日本には、スパイ罪がなく、一方通行。

新生明治の元勲たちは、萩の展示物が示すように、

当時の列強との不平等条約の解消に心血を注ぎ、

当時の日本国の国民と共にそれを成し遂げた。

時移り、昭和と平成の日本列島の民は、

これら４国からの不平等条約的扱いを受けても、

「平和念仏」をひたすら唱えて、耐え忍ぶ有様。

深堀りすれば、足元では、

主体性の放棄こそ「平和」と信じ、

今や、メディアも情報操作で効果を競い、

それこそ得体の知れない日本人集団が存在する現実。

さらに、揉み手さえすれば相手が譲歩し、

「おもてなし」の商人根性でニコニコすれば、

こちらに好意的に必ず対応してくれる、

との空想が染みついた昭和と平成の日本人。

明治は遠く・・・・・。

「空想」こそ、無責任者の特権である。

下関港岸壁での、沸騰点に近い達観となる。

**巌流島**

翌日、

唐戸桟橋（20分）巌流島（10分）門司港（5分）唐戸桟橋の

関門海峡トライアングル航路。

武蔵と小次郎の決闘像があり、激闘は

慶長17年（1612）に行われた。

武蔵が木刀での決闘（複数）方法は、説明では、

例外なく、撲殺だったそうである。

売店なく、壊れかけたような自販機が一台。

島の住人は宮本さんと佐々木さんだけで、

４３０歳と４７０歳のご高齢、二人合わせて９００歳。

北に下関、東に門司港、北東に関門大橋、

目の前が関門海峡で、神戸育ちには落ち着く風景。

１日７００隻の船舶が狭い海峡を通過するとか。

**門司港レトロ地区**

以前の神戸の海岸通りを思い出す。

イベント最中で、屋台がズラリで人多く賑わう。

見ていると、人々が慌ただしく行き交うだけで、

会話も笑いもなく、スマホを操作しながらの行き交いで、

家族連れでも親子の会話も目にしない。

もちろん、すべてではないが。

有機的な人間の結びつきが失われ、

ホモサピエンスは、電波介在で、

ますます個体化するのが２１世紀の特徴。

例外は、我ら安嶋主幹主催のweb「ROKKO」。

**旅情有感**

山陰を経てきた旅人には、

あまりの違いの、「陰」と「陽」の様相に、

様々な歴史の重厚さと軽薄さが入り混じるものの、

年のせいか、旅情は下記のように啓上。

今なお、この国は、

**「くにおさなく浮きし脂（あぶら）の如くして、**

**くらげなすただよえる」（古事記）**

**国稚く（幼く）、あぶらのように、**

**クラゲのように漂う**

天地開闢の日本のこの状態から、

現在に至るも脱却していない。

**なんだか、日本国そのものが、**

**古事記的「歴史遺産」となっている。**

だが、旅はいいもの、歴史のおさらいもでき、

天候にも恵まれた。

帰途、旅を振り返りながら、感じたのは、

津和野の、その情景とそっくりで、規模は小さいものの、

John DenverのWest Virginia 賛歌

”Country Road”と合致する！

７０年代初期に頻繁に流れた名曲と名歌詞。